

箆形土器



①概要

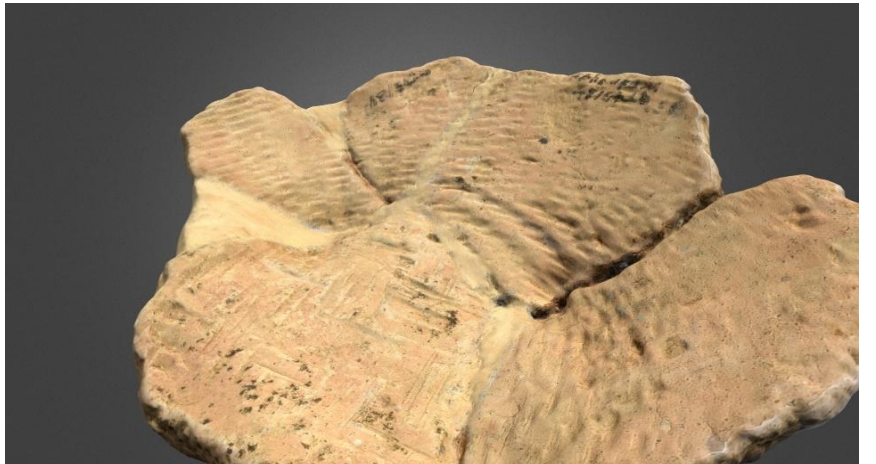
行者塚古墳の西造り出し（にしつくりだし）を中心に、「箆形土器（ざるがたどき）」と呼んでいる遺物が出土しています。小さな破片が多くどれもよく似ているため復元が難しい遺物で、ある程度の形まで復元できたものは4点程度です。全体では少なくとも15点は存在したと考えられています。今回は、そのうち3点を公開しています。

2枚が重なった状態で出土したものもありますが、主に食物形土製品を入れる器として使われた祭祀の道具と考えられます。大きさは似通っていて、口径12cm前後、高さ4cm前後になります。

②ここに注目！！



箆形土器は、内側にも外側にも写実的な編み込みの箆の痕跡が認められる特徴的な土器です。作り方は、丸い粘土板を2つの本物の箆で挟み込んで圧力を加える方法で作られています。木や竹などの有機物は腐朽するため遺跡からはほとんど見つかりませんが、行者塚古墳の築かれた5世紀頃にどんな箆が使われていたかを具体的に知ることのできる貴重な資料です。



本物の箆を写し取ったものであるため、詳細に観察すると当時の箆の作り方を復元することができます。

底部は、幅4mmほどの材12本を2本1組として、タテヨコ各6組を網代編みし、方形の底部を作っています。立ち上がったからは幅2mmの材を加えて綾編みし、胴部が円形になるようにします。最後に上半部をシンプルな箆編みで仕上げて完成です。



内面に黒斑（こくはん）と呼ばれる黒いシミがみられるものが、破片を含めて全体の1/3ほど認められます。内面全体を黒くしているものもあり、意図的に内面のみを黒く仕上げる意図があったものと考えられます。